資　料：

寺内文庫旧蔵「韓国関係（簡牘／法帖類）資料」について
～韓国／慶尚南道／慶南大学校への寄贈の顛末～

熊本　守雄

○発端

平成6年9月5日（月）午前11時頃、韓国 SISA JOURNAL 東京特派員蔡明錫氏より電話があり、「本日の『ソウル新聞』（韓国の三大紙の一つで、政府系の由）の一面のトップ記事で、来年の戦後50年、日韓国交回復30年を記念して、山口女子大学蔵の寺内文庫の韓国関係資料が返還されることになった。これは日韓議員連盟会長の竹下登元首相の斡旋と田中龍夫氏の尽力で実現したものである、といった趣旨の記事だが、間違いないか？」という問い合わせであった。

私としては、全く承知していないことで「寝耳に水」の感じであり、国際文化学部が発足したばかりであり、大学としては返還など考えられないことである、と返答した。

翌日、韓国ソウル放送東京支社の蔡明錫特派員からファックスが入り、それによると、「昨日の韓国のソウル新聞の記事は誤報であることが確認されました。News源である韓日議員連盟も、その事実を否認しました。ご参考に「ソウル新聞」の関連記事をFAXいたします。」とあり、新聞のコピーをファックスで送ってきた。

私が平成17年（2005年）3月末日に山口県立大学を定年退職するに先立って、慶南大学校に韓国関係資料を寄贈した経緯を記した書類一式（ファックス・新聞・名刺等も含む）を、国際学術交流の担当でもあった学生部長の折戸洪太教授に、引き継いでもらうために、一括して託した。従って、今の私の手許には、その原資料はない。

今、私の手許にあるのは、平成10年（1998年）10月30日付で、読売新聞編集委員の丹藤佳紀氏より私宛に取材のためのファクシミリが送付されてきて、その返信をした時のファックスの原稿である。

その内容を転載することにする。まず、丹藤佳紀氏の「取材の目的」「お尋ねする項目」の内容を記し、それに対する私の回答内容を、そのまま転記することにする。

〔取材の目的〕

小紙でいま「20世紀 どんなじだいだったか」を連載しております。その特集として「戦争・植民地統治と文化略奪」を企画し、ナチスの文化財略奪を含めて取り上げることを考えています。

日韓間では豊臣秀吉の朝鮮出兵に始まる歴史的な経緯があり、日本統治下に日本に流入した文化財で、民間所有のものは日本政府が（韓国への）返還を奨励することになっていますが、わずかなケースにとどまっています。

そうしたまれなケースのひとつとして貴大学の事例を紹介したいと考えています。場合によりまして、貴大学のカウンターパートである慶南大学校への取材も必要になると思います。

〔お尋ねする項目〕

1　慶南大学校へ寄贈された「寺内文庫」の書画類の点数・内訳。
2　「寺内文庫」は貴大学の所有していたものでしょうか。また貴大学の所有に至った経緯はどんなものでしょうか。
3　その書画類を慶南大学校へ寄贈するにいたった経緯。どなたの発意でその話が具体化したのでしょうか。
4　山口県と慶尚南道には友好関係がある由ですが、貴大学の寄贈とその友好関係とのつながりは（前項に重なるかも知れませんが）。
5　貴大学と慶南大学校とのその後の交流。

以上です。

〔回答〕

1　慶南大学校へ寄贈された「寺内文庫」の書画類の点数・内訳。

→98点　135冊（簡牘・法帖類97点、文書1点）

①送別詩帖	13点	16冊
②書画帖	3点	3冊
③遺墨・真筆・書写帖	48点	51冊
④図帖・画集・画帖	3点	3冊
⑤尺牘帖・簡帖・書状（手紙類）	26点	57冊
⑥拓本	4点	
⑦文書	1点	

内容的には、15世紀～19世紀のものが多い。

2　「寺内文庫」は貴大学の所有していたものでしょうか。また貴大学の所有に至った経緯はどんなものでしょうか。

→山口女子大学（現、山口県立大学）の所有。

寺内寿一元帥がなくなって、戦後、寺内文庫は閉鎖されていた。

◎昭和22年1月～31年1月（10年間）

寺内寿一氏の夫人であった寺内順子氏と、賃貸借契約を締結。山口県立女子専門学校及び山口女子短期大学の付属図書館として、寺内文庫を借用。

◎昭和32年1月

寺内文庫の土地、建物を山口県が買収、（235万 8060円）。

◎昭和32年7月

寺内文庫の図書、書画、写真帖、器具（書棚. 机等）を寺内順子氏から寄付採納。

（松林桂月氏を通してお礼を渡す。謝礼金 3万円贈呈）

図書	19,036冊（朝鮮本1,045冊）
書画・写真	511点
書棚. 机類	70点

3　その書画類を慶南大学校へ寄贈するにいたった経緯。どなたの発案で、その話が具体化したのでしょうか。

→◎平成6年（1994年）3月31日

大韓民国、国史編纂委員会委員長朴永錫氏が来学。韓国の歴史研究を進めるため、韓国への返還をお願いしたい、と申し入れがあった。

◎平成6年6月1日

韓国国会議員（韓日議員連盟運営委員長）の金永光氏が山口女子大学を訪れ、寺内文庫の調査の申し入れを行う。後日　（6月28日）に泰東古典研究所所長任昌淳氏（文化財専門委員）ら3名が調査に訪れた。

◎平成6年9月26日～28日（3日間）

韓国の国立中央図書館から古典運営室長の李貴遠氏ら2名の古書専門員が朝鮮本の調査のため訪問。

韓国国立中央図書館では1987年（昭和62年）から日本に所蔵されている朝鮮関係の古書について調査及び影印事業を推進しており、これまで東京大学総合図書 館を始め、14の図書館を訪問して調査と複製を実施していた。

◎平成7年（1995年）2月21日

「釜山日報」の記者及び大韓民国総領事館員ら3名の者が訪問、取材。

・韓国のマスコミは海外に流失した文化財を求めて、西独やアメリカなど世界中に 特派員を派遣して取材しているということであった。

※平成7年（1995年）という年は、終戦50年、日韓国交回復30年という節目で、大キャンペーンを実施しているようだった。

◎平成7年7月20日

河村建夫代議士（山口県選出国会議員、田中龍夫氏の後継者）とともに、金永光議員が再度、山口女子大学を訪れ、前年の6月28日に実施した調査に基づく朝鮮関係書画類（重要書帖・古文書）のリストを持参し、その寄贈の申し入れがあった。（韓日議員聯盟、韓日親善協会中央会）

寄贈申し入れのリストは、書画類105点、142冊となっていたが、内容を精査したところ、実際は106点、147冊。その中には、北朝鮮や中国に関係のあるものが8点12冊含んでいた。

※寄贈の申し入れを受けた山口女子大学としては、平成6年に文学部を改組転換して国際文化学部を新設したところであり、国際交流の一環として、韓国の大学との交流を望んでおり、山口県と姉妹提携を結んでいる慶尚南道の大学との学術交流を前提として、寄贈する方向で、書画類の評価、寄贈の範囲及び時期等を検討した。（北朝鮮及び中国関係のものを除くことについては、韓国側の了解も得た。）

※韓国の国内には、キャンペーン等を通して、「初代朝鮮総督寺内正毅が朝鮮から持ち帰った貴重な資料を返還してもらいたいという根強い意識が残っていることを考えて、単に「寄贈」という形ではなく「大学間の学術交流の一環として寄贈する」という形をとる方が適切と考えた。

※寺内文庫の朝鮮資料は、いわゆる戦後処理問題に係わるものではないことから、「返還」すべきものではない、という立場を貫いた。

・寺内文庫の朝鮮関係の書籍類は、当時、とかく蔑ろにされがちであった状況を工藤壮平氏が憂えて、寺内正毅氏に進言したのを受けて、寺内家が私財を投げ出して、個人的な売買により入手したものである。

・ボストン美術館における日本美術品収集の状況に近い。岡倉天心……フェノロサと古美術保存に携わる。

・寺内正毅氏は、朝鮮総督就任後、朝鮮の文物に関心を寄せ、積極的にその保存と調査を心がけている。

・「総督訓示案」に、伝統に毀損変化させぬよう、留意することを、わざわざ加筆訂正している。

・朝鮮総督府の組織を通じて、地味な調査、民俗・風俗の調査、朝鮮金石文の調査なども行

なっている。
- 著名な海印寺の高麗版大蔵経板木の修補、覆刻を行なっている。これらに、寺内正毅氏の朝鮮文化への関心と理解の深さを窺い知ることができる。
- 購入した際の事情がわかる紙片の添付された資料もあって（八十円で承諾したが、拙者には小利も無い）といった売品を持ち込んだブローカーらしき者の書き付けも見られ、工藤壮平氏の尽力で、散逸しかけたものを、保存するために収集したと考えられる。

※寺内正毅氏は、明治天皇からの下賜金を寺内文庫の典籍購入資金に充てており、私財で購入したものであり、韓国のマスコミが「強奪」などと報道しているのは、全く謂われのないことで、朝鮮総督であったということで先入観をもって見ているような状況がある。

このため、先方の大学校からの依頼の公文書としては、「返還」を求めるといったような内容ではなく、あくまでも、友好関係に基づく「寄贈」であるという立場を貫いた。

◎平成7年7月27日

金永光議員から学長あてに、寄贈の受け入れ先として、慶尚南道に所在する慶南大学校を推薦する旨の通知があった。

◎平成7年8月8日

慶南大学校の朴在圭総長からも、同様の趣旨の書簡が届いた。

※寺内文庫の蔵書の全部を山口女子短期大学に寄贈するという申し出が寺内順子氏よりあった際に、「将来、寄贈の図書が処分される場合がある時は、あらかじめ寺内家に打ち合わせのこと」という申し合わせ（昭和31年12月19日）の一項があるので、事前に寺内家の意向を確認した。

◎平成7年10月17日

外務省において、田中龍夫氏と河村建夫代議士の立ち会いのもと、寺内家当主の寺内嘉雄氏と山口女子大学の関係者とで協議し、寺内家の賛同を得た。「大学間の交流のためということであれば、大変結構である」という寺内嘉雄氏の発言があった。

〔令和3年8月、熊本補記〕

この時点まで、学術交流大学校も決まり、寄贈する典籍のマイクロフィルム化のための撮影及び専門業者による資料の修復作業等々、準備が順調に進行していた最中に、思わぬ事態が発生した。

平成6年6月1日の韓日議員聯盟運営委員長・金永光韓国国会議員の本学訪問の最初から同行取材をしていた毎日新聞山口支局の記者から「韓国の今日の新聞が、寺内正毅初代朝鮮総督が強奪した典籍がこの度返還されることになった、と報道している」と、その新聞と翻訳文を示された。

私は、このような状況下では、本学の学術交流のために寄贈するという立場も否定されることになり、寺内家に対しても、迷惑をかけ、申し訳ないことになると判断して、高山治学長に、「この度の寄贈は止めるべきだ」と進言した。そして、大学として、その旨を先方に伝えた。その後、河村建夫代議士と韓日議員聯盟の池鉄敏事務総長が奔走・周章して、韓国の新聞社に経緯を正確に報道するよう、訂正記事を書くように、働きかけたようであったが、数行の記事で「山口女子大学では、この度の資料は、寺内家が私費で購入したものだ、と主張している。」と記述するに止めており、訂正記事は掲載されなかった。

◎平成7年10月27日

金永光韓国国会議員と河村建夫代議士とが揃って来学して、寄贈はあくまでも学術交流を前提としており、返還ではないことの共通認識を確認した。

◎平成7年11月11日

山口女子大学において、山口女子大学・慶南大学校覚書調印式を行なう。学術交流に関する予備協定書を交換し、目録を贈呈する。

◎平成8年4月27日

慶南大学校において、慶南大学校との学術交流に関する協定を締結（調印式）、その後、寺内文庫特別展示室開所式を行なう。

4　山口県と慶尚南道には友好関係がある由ですが、貴大学の寄贈と、その友好関係とのつながりは（前項に重なるかも知れませんが）。

→韓国と山口県との交流は、1983年（昭和58年）に山口県知事が西日本漁業4県訪韓団団長として訪韓の際に、慶尚南道庁を訪問して以来、水産・観光・経済などの交流が続いていたが、それまで培ってきた交流を基礎に、善隣友好関係を更に推進するため、1987年（昭和62年）6月に、山口県は慶尚南道との間に姉妹提携を結んだ。

5　貴大学と慶南大学校とのその後の交流

→平成8年(1996年）7月7日（月）～8月5日（月）

日本国際教育協会の援助を受けて慶南大学校から日本語を学習している学生を中心に20名の学生を招いて1ヵ月間夏期短期語学 留学生として受け入れた。

平成9年度（1997年度）から県費対応の事業として、三大学（山口県立大学、中国山東省曲阜師範大学、韓国慶尚南道慶南大学校）の「トライアングル学生交流事業」が発足し、両大学から毎年学生各10名を招いて、短期語学研修を中心に日本文化・日本事情等に理解してもらうことにしている。

本年度（平成9年・1998年）は、6月26日（金）～7月25日（土）の1ヵ月間

- その他、留学生および短期の科目等履修生として受け入れている。
  本学の学生も語学研修で夏休みの期間を利用して、およそ20名ぐらいの者がお世話になっている。
- 慶南大学校との学術交流協議
  本年度は 10月25日（日）～10月29日（木）にかけて、慶南大学校から3名の訪問者があって、交流を持った。（団長の金正夫副総長から、学生に対する講演もしてもらった。）
- 慶南大学校から寺内文庫の共同研究の申し出もあったが、予算の対応ができず、実現していない。
- 協定書では「相互の研究資料等を交換する」という一項があり、こちらも先方に朝鮮において発行された日本語関係の文献を中心に72点のリストを平成8年4月に手渡しているが、未だ実現していない。

［令和3年11月10日、補記ー憶測も交えてー］

＜その1＞

寺内正毅が私設の寺内文庫を創設しようと考えたきっかけは、長女の沢子さんが、徳山（現、周南市）出身の児玉源太郎大将の子息秀雄氏に嫁ぎ、児玉家と縁戚関係になったことに発する。明治36年に開庫された児玉文庫には、正毅氏は文庫評議員として関わり、児玉文庫が徳山という地域におきて親しまれ、大きく貢献していた、その教育力に思いを致し、己の郷土・山口宮野の子弟に対して史書に学んでほしいとの思いを一層強くして、文庫の創設に思い至ったものと思われる。

更に、その背景には、当時（大正期から昭和初期にかけて）山口県では図書館活動が極めて盛んで、県内の全ての市町村に公立図書館が設けられており、加えて各地の篤志家によって、私設の図書館・文庫も運営されていた。難波大助の生家（光市の名家難波家）においても私設の図書館を開設していた。

これらの図書館活動には、山口県立山口図書館の存在とその影響力とを忘れてはならない。

山口県立山口図書館は明治36年（1903年）に創設され、初代館長に佐野友三郎氏が就任し、県下の図書館に指導的な立場で大きな影響を与え続けた。又、大正7年（1918年）には山口図書館分類法である十進分類法が全国の図書館の標準分類法として採用されるなど、全国の図書館界にも大きな影響を与えた。佐野友三郎館長のあとをうけて、大正10年（1921年）に厨川肇氏が2代目館長に就任し、以後20年間在勤し、山口県下の公私の図書館にも助言・指導を行い、県下の図書館活動を大きく推進させた。

そうした状況下の許に、桜圃寺内文庫も創設され、運営されていたと思われる。

図書館の普及活動も、「教育は未来への投資である」といった理念の許に推進されていた、と考えられる。

＜その2＞

平成7年7月20日に、韓日議員聯盟・韓日親善協会中央会が寄贈を希望してきた朝鮮本のリストは、書画類105点、142冊となっていたが、内容を精査したところ、実際は106点、147冊であった。その中には、北朝鮮や中国に関係のあるものが8点、12冊（「幅」も含む）含んでいたことは、既述した如くで、それを列記する。（番号は、韓国側が希望してきたリストの通し番号）

≪北朝鮮関係及び中国関係の資料≫

20.『白下帖』〔中国拓本〕1帖
晋　王献之書の刷本。

27.『北征贈言』〔北朝鮮関係〕1帖13丁、宣祖38年（万暦33年、1605年）咸鏡道（北朝鮮）観察使李時発の赴任に際する知友の贈詩帖。韓百謙、李廷亀、鄭述、呉億齢、李徳馨等の親筆詩帖。（注）李廷亀は、李朝中期の四大家の一人。

30.『似蘭帖』拓本〔中国拓本〕1帖、13丁中国名筆拓。金石拓本貼込帖。王義之、欧陽詢等。

57.『古簡書』〔北朝鮮関係〕2帖、19丁
小口書に延域遺墨と記す。李明漢、李一相、李殷相、李啓、李廷亀、李弘相等、即ち延城李氏諸名人の書。但し、後人の書写。
（注）延城…黄海道・延白郡（北朝鮮）

64.『謙斎関東六景』〔北朝鮮関係〕1帖、4丁
鄭敾（謙斎）の画帳。江原道（北朝鮮）の関東六景。

75.『龍湾勝遊帖』〔北朝鮮関係〕1帖、6丁
景宗3年（1723年）癸卯、遠接使趙泰億等が使命を以て義州に赴き、平安監司李真倹、義州府尹権益淳、迎慰使李弘模、問礼官呉命新、魚川道李時恒等と統軍亭、九龍亭に遊びし時の詩帖。

104.『広開土王陵碑拓本』〔北朝鮮関係〕4幅
高句麗広開土王好太王陵碑、大正時代の新拓。中国と北朝鮮の国境に流れている鴨緑江のほとりに建っている碑。

105.『広照寺碑』〔北朝鮮関係〕１幅

海州古蹟保存会。黄海道（北朝鮮）にある広照寺の碑。（拓本）

以上の8点、8冊・4幅については、寄贈の対象から除外することを韓国側も了解して、最終的には慶南大学校に寄贈する書画類の点数は、98点、135冊となった。

なお、平成6年6月28日に、寺内文庫の調査に訪れた文化財専門委員で泰東古典研究所所長の任昌淳氏は、「青溟」と号する書家で、関心は書跡にあったように思料された。

＜その3＞

寄贈の対象には全くならなかったが、寺内文庫の蔵書には、銅活字本や木活字本が存している。参考までに列挙してみる。

≪銅活字本≫

- 『東國通鑑』56巻23冊、成宗の命によって、徐居正・申叔舟等が成化年中に編纂した編年史。新羅赫居世から高麗共讓王までを扱う。粛宗19、20年（1693-4年）頃の刊か。銅活字（改鋳甲寅字）。
- 『栗谷先生全書』32巻拾遺6巻、23冊、李珥著　己巳南陽　洪啓禧跋　英祖25年（1749年）銅活字本

≪校書館　活字印出本≫

- 『攷事新書』徐命膺修　15巻7冊　英祖47年（1771年）校書館活字印出本
- 『林忠愍公実記』林慶業　李太王27年（1890年）校書館重刊　銅活字本

≪銅活字　韓横字刊本≫

- 『東史会網』林象徳　12巻13冊　銅活字韓横字刊本
- 『攷事撮要』魚植重修　4巻3冊　活字本韓横字　18世紀初の刊本

≪活字（整理字）≫

- 『桂花筆耕』20巻4冊　新羅　崔致遠著　李大王20年（1883年）癸未刊　活字（整理字）

≪木活字本≫

- 『御製政訓』英祖　1冊　木活字　英祖25年（1749年）刊
- 『中京誌』金堉撰　金履載等補　11巻6冊　哲修6年（1855年）刊　木活字
- 『文昌録』楊演泳等編　隆熙3年（1909年）5月　湖南義士　木活字
- 『順菴先生文集』27巻15冊　安鼎福著　光武4年（1900年）刊　木活字

＜その4＞

寺内正毅氏は、朝鮮総督府の組織を通じて地味な調査、民俗・風俗の調査、朝鮮金石文の調査なども行い、朝鮮の文物に関心を寄せ、積極的にその保存と調査を心がけている。

初代朝鮮総督として朝鮮を統治するため、これらの事業を行い、報告書にまとめさせている。

寺内正毅氏が、朝鮮総督府に命じさせた、このような多くの調査事業を通じて、私が想起するのは、漢王朝創業の功臣で、相国として、漢王朝の基礎を築いた「蕭何」の姿である。

司馬遷の『史記』「蕭相国世家」の記述は、次の如くである。

- 沛公の咸陽に至るや、諸将、皆争うて金帛財物の府に走りてこれを分かつ。何は独り先に入りて、秦の丞相・御史の律令・図書を収めてこれを蔵す。

（沛公が咸陽に入城したとき、大将たちは争って秦の金銀財宝倉庫にかけつけて分取りにかかったが、蕭何だけはまっ先に秦の宰相や検察官の法律文書を手にいれてしまいこんだ。）

- 沛公の漢王と為るや、何を以て丞相を為す。項王、諸候と咸陽を屠り焼きて去る。漢王の、具さに天下の阨塞、戸口の多少、強弱の処、民の疾苦する所を知りし所以のものは、何が具さに秦の図書を得たるを以てなり。

（沛公が漢王になると、蕭何を宰相に任命した。項王は諸侯とともに、咸陽を殲滅、放火してたち去った。漢王が天下の軍事的要害とか、天下の戸数人口の多少、兵の強弱のところとか、人民の悩みとかを詳しく知ったのは、蕭何が秦政府の文書をそろえて入手しておいてくれたおかげである。）

このような蕭何の思慮と行動が、国を統治する際に大事であることを、寺内正毅氏は司馬遷の『史記』から学んだのではないか、と私は常々感じている。